



【中野キャンパス】人文社会学部 教育学科 小学校・特別支援コース 講師

佐藤 かほり Sato Kahori

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)



キーワード : 学習障害・学び方の多様性・通常の学級・通級による指導・
早期の教育的対応

研究の概要

SDGs 目標 3 : すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標 10 : 人や国の不平等をなくそう

認知発達の特徴が要因となる学習上の困難は、早期の教育的対応がなされなければ学年進行とともに困難が深刻化するとともに、学習意欲や自己肯定感の低下等の二次的な問題を引き起こすリスクが高いことが指摘されており、予防的な視点が重要である。自身の教育行政における臨床実践を踏まえ、今後の課題は以下2点と捉える。

I. 通常の学級における早期の教育的対応の実態把握

認知発達を背景とした学びの困難について就学後早期段階での詳細な見立ては難しい。しかし神経心理学的検査結果や医師の診断を待った対応ではなく、教員の早い段階での気づきをもとに通常の学級における学びの困難に特化した教育的対応の好事例や教育的対応を阻害する要因、また有効な指導や支援につながるアセスメントについて、その実態を明らかにする。

II. 学びの困難を有する子どもが「自走できる」力を育むシステムの構築

学びの困難を有する子どものうち、特に認知発達の特徴を背景とした学びの困難については、教育環境の整備が重要である。子どもの学びの困難を保護者や教員を含む指導者・支援者が認識し、どのような学び方が望ましいのか(学び方の多様性)について検討を重ね伴走することで、子どもの自走力を育む産官学の協働システムの構築を目指す(図1参照)。

2024年度より『帝京平成大学中野こども楽舎』が開設された。中野キャンパス近隣の小学校2年生を対象に、学びのつまずきに対する早期対応を目的として、学生と教員が協同し学習支援や余暇活動をおこなう地域連携事業である。

2025年度からは、『児童研究Ⅰ・Ⅱ』の授業科目として位置付けられた。教員養成課程の学生が参加児童との信頼関係を構築し、児童理解を深め、参加児童の教育的ニーズや興味関心に応じた教材等について考える力の育成を目指している。



図1 産官学協働システムのイメージ

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

GIGA スクール構想により各小中学校において、ICT 活用が推進されているものの、子どもが学びのツールとして自由に利用可能な状況とは言い難く、その活用方法は学校現場において模索段階と言える。就学後早期段階における認知発達の特徴を背景とした学びの困難については、特に ICT を活用した指導・支援の為のアセスメントツールや個別最適化された教材の開発が求められる。保護者や指導・支援者の伴走が最小限であっても、子どもが自力で取り組める仕様こそが「学びの持続可能性」を高めると考える。

文部科学省の調査(2022)によれば、通常の学級担任が学習困難を指摘した児童の割合は小学校低学年で1割近くに及んでおり、就学後早期の教育的対応が望まれる。産官学協働システムの具現化により、認知発達の特徴により学びの困難を有する子どもたちに関わる早期教育的対応モデルの構築が期待される。

知的財産・論文・学術発表など(詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください)

「学習障害(LD)における早期の教育的対応に向けた一考察」